

24

チーム力とプレゼンテーション力を向上させるための情報教育

酒井知果（華頂女子中学校・高等学校）

1. 研究の目的

本校では2007年度よりコース制を導入し、その1つとしてクリエイティブコースを設定し、今年で4年が過ぎた。このコースは本物の文化にふれる体験や、他校では類を見ないユニークな授業（京の伝統工芸、バレエなど）があり、生徒の個性（創造力・表現力）を磨くことを目的としている。その中で、情報科が行っている科目「Web & プレゼンテーション」は生徒たちの個性を磨く、もっとも大切な科目の一つとして位置づけられている。コース設置当初、入学してくる生徒たちは、個々には創造力や表現力を持っているが、集団で作品制作をしようとするときそれぞれの個性がひきだされなかった。これが生徒を見ていての実感であった。そこで、情報科ではそれぞれの生徒が持つ力がチーム活動をしたときにも生かされ、さらにそれぞれの個性が発揮できるような内容の授業を行い、学校だけではなく、企業でも大切な、役に立つチーム力・プレゼンテーション力の向上ができるようなカリキュラムを構築し、授業実践を進めることにした。また今回この実践をするにあたり、トゥワイス・リサーチ・インスティテュートが提案している「TWICEPLAN」の内容も取り入れた。

本研究では1年間の授業の取り組みを通じて、「チーム力」と「プレゼンテーション力」を伸ばすことができるかを検証した。

2. 授業の内容・経過

1年間の教材については、TWICEPLANのワークを利用した。このワークは主にチームでの取り組み、そして取り組んだ内容を発表することを目的としているものであり、「チーム力」と「プレゼンテーション力」を高めるためにはとても最適なワークである。さらに、ワークの使い方や進め方は学校によってアレンジ可能となっているので、本校のコースの共通目的である生徒の個性（創造力・表現力）を磨くことを意識しながら、教材のアレンジを行った。

コンピュータの使い方や資料収集・編集などの方法は、情報科教員の指導だけでも十分かもしれないが、生徒たちが取り組むテーマ決め、チームでの取り組み方、作品制作・発表方法についてはトゥワイス・リサーチ・インスティテュートのコーディネーターからアドバイスをいただいた。情報科教員とコーディネーターが協力することが研究を進めるにあたり重要である。今回は本校のコースの目的や本研究の内容も考慮し、年間を通して以下のことを確認事項として授業を進めた。

1. チーム活動を基本とする。
2. チームでディスカッションをしながら、課題解決に向け活動する。

3. 取り組みの最後には必ず発表を課す。発表では事前準備と下調べ、クリエイティブコースらしく作品のビジュアルに気を遣ってまとめかたを工夫する。
4. プレゼンテーションに必要な内容構成方法、論理性や客観性、信用性などのチェック方法の確認をはじめ、資料作成の方法を学ぶ。
5. 聞き手に伝わる表現とは何かという基本を踏まえ、本番での立ち方や声の出し方、どのような準備や心構え、練習が必要かを学ぶ。

授業は以下の流れで進めた。

< 4月～6月の活動 >

LIFE「そう、こんな人生もあるんだ」ロールモデルの人生を描く“人間ドキュメンタリー”



さまざまな分野で活躍した人物の歩んだ道筋をたどりながら、人生とは何かを見つめていく。チームは2～3名で気の合う仲間チームを組んだ。その後、チームごとに選んだロールモデル（本校は女子校なので、女性のロールモデルに限定した）の歩んだ道筋をたどり、ロールモデルのドキュメンタリー作品を制作した。発表方法は、チームで考え、パソコン以外（例えば寸劇や紙芝居、映像など）でも可能とした。

制作期間は約2カ月あったが、1か月経過した段階で中間発表を挟み、各チームの進捗状況の確認や生徒によるチームへアドバイスやフォローを行うこととした。中間発表後は、「緊張したけど面白かった」「もっとこうすればよかった」などの意見、同じ人物を選んだチーム同士はチームによって視点が違ったため、「ここがいいな」とか「私たちよりずっと多く調べている」などお互いに意識していた。自分たちなりの改善点や反省点をすぐに見つけだし、「本番は今まで以上に頑張りたい！」という意見が多くみられた。



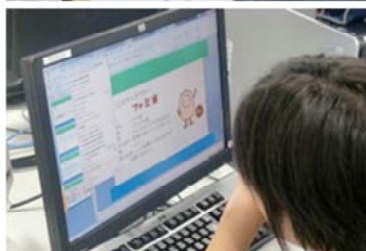
中間発表前は、一人の人に作業がかたよるチームもいくつかあったが、中間発表を終えて、それぞれ目標が明確になったことでチーム全員で、発表の演出を考える様子が多く見られるようになった。また以前よりもコミュニケーションが多くなった。

約2カ月の制作期間を経て、本番で発表をしたが、すべてのチームが中間発表の時よりも深く考察されており、またチームらしさも表現されていた。

チームで取り組むことや、多くの人前で発表する機会が少ない生徒にとって、今回の取組みはととても大変だったはずであるが、生徒たちは課題をやりきった達成感や作品の完成度の高さにととてもやりがいを感じていた。

< 9月～1月の活動 >

COMPANY「もしも企業に勤めたら!？」日本を代表する企業に学ぶ“企業インターン”



日本を代表する有名企業のインターンとして、企業の課題に取り組んだ。今回は大塚製薬、FamilyMart、みずほフィナンシャルグループ、読売新聞にご協力いただいた。実在する企業へインターンができるということで、どのチームも真剣に企業選びをした。チームでの最初の取組みは、企業の人との“グループ面談”であり、企業研究をはじめ、企業の方への質問を、チームごとに考えた。スカイプやビデオレターを通して行ったが、企業の方も一つ一つの質問に真剣に答えていただいたことで、生徒たちの取組む姿勢が最初からとてもよかった。グループ面談後、各企業からチームへ指令が渡された。大塚製薬『Soylution』の考え方に基づいた新製品を提案すること!」、FamilyMart「今までにありそうでなかったスペシ



「コンビニを提案すること」、みずほフィナンシャルグループ「銀行について楽しく学べる“中高生向けの教材”をつくること!」、読売新聞「中高生や大学生にもっと読売新聞を読んでもらうためのCM企画を提案」。高校生の目線で、現代の企業活動をしっかりと捉え、企業の一員として会社の今と未来を一緒につくり上げていくことを目標に、約3カ月の制作期間を設けた。前回同様、途中で中間発表を設け、お互いの作品にアドバイスやフォローをしながら制作を進めた。新商品提案にむけて、アンケートを実施したチームもあり、実際に考えた教材を生徒たちに見てもらったチームもあった。チームの中には1からすべて企画するということがとても難しく、途中で挫折しそうになるチームもあったが、何度もブレインストーミングをしたり、企業の方にアドバイスをもらうことで、チームで企画がまとまってきた。

約3カ月の制作期間を経て、すべてのチームが本番で発表をしたが、同じ企業からの指令でもチームによって全然企画が違っており、内容もとても工夫されていた。また6月のプレゼンテーションよりも、今回のプレゼンテーションの方が、聞き手に伝える表現が豊かになっていた。

3. 本研究の成果

1年の取り組みを通し、チーム力、プレゼンテーション力を伸ばす実践を重ねてきた。生徒にとったアンケートでは、「他の人の意見と自分の意見が合わず苦労したが、最終的に協力をする事ができた」「自分の意見を持つことができた」「みんなで一つのことを考えることの大切さや協調性が身についた」「相手に何を一番伝えたいか・・・伝えきった時、やりきった時の達成感がとてもうれしかった」「発表の構成を考えるのがとても大変だったがやりがいのある授業だった」「資料を集めることはそんなに苦労しなかったが、文章をまとめるのがとても難しかった」「プレゼンテーションをすることが今までにほとんどなかったので、とても緊張したが、何度もする内に少しだけ緊張しなくなった」など生徒自身が多くのことを感じてくれた。

チームメンバーとの協力方法や発表の方法を身につけることができたので、他教科や行事などにも活用できる応用力もついたと考える。また今後、大学生活など様々な場面で、これまでの取り組みを活かして力を発揮できるだろう。

4. 今後の課題

生徒たちのチーム力やプレゼンテーション力を向上させることができたのは間違いはないが、その力を発揮する場所を今後は多く作っていく必要がある。次年度以降の課題としたい。またごくわずかとはいえ、プレゼンへの苦手意識が強い生徒たちの成長は期待したほどではなかった。どんな生徒たちに対しても通用する取り組みを構築することも残された課題である。